第四歩 1-2

1人の高校生が残した「非常勤講師派遣」のしくみ

～闘病しながら希望を絶やさず。メールが市長の心を動かした～

大阪府・久保田鈴之介さん

後に続く高校生のために

久保田鈴之介さんが背中に痛みを覚えたのは中学生2年生13歳（2008年）の時です。「剣道で転んだからかな？」と言いつつ病院で診てもらったレントゲンの映像では、肋骨にあった腫瘍がすでに大きく膨らんでいました。1か月以上をかけていろいろな検査を行い、細胞を調べると「ユーイング肉腫」という小児がんです。

入院となり、抗がん剤治療が始まって嘔吐が続き、剣道は出来なくなり、すぐに髪の毛は抜けました。病気と闘いながら勉強が遅れる焦りが出てきます。「高校にいけるのだろうか？･･･」

病院には小中学生の院内学級があり、抗がん剤治療で苦しくない日は病室から数十mの教室に通いました。いろいろな病気を持った子どもたち、病気も年齢もバラバラな子どもたち、自分よりもずっと症状が悪く歩けないでベッドごと運んでもらったり、言葉を発することさえ苦しそうな子どもたちと教室で過ごし、放課後は病気や症状、生活のことを話し合ったりしながら闘病仲間のつながりを深めていました。

やがて退院し、中学校に戻り高校へ進学したのですが、剣道でインターハイ出場を夢見ていたころに再発しました。今度は「大量化学療法」という怖い名前の治療法でがんと闘います。治療と勉強、今度は大学への進学希望が一層難関になってきます。同じ病院には高校の院内学級は無かったのです。カーテンに囲まれた狭い病室の部屋でがんと闘い、再び寛解を迎えた時に、後に続く高校生のためにこんな思いをさせたくない、と大阪市長にメールで院内学級設置を訴えました。

この時の経緯を、市長とつないでくれたＹ区長が鈴之介さんにくれたメールで紹介します。

【区長メール】

「初めまして。区長のＹと申します。市民の声については区役所を経由するので、久保田さんのご意見を目にしました。府立高校なので府へも伝えます。またしっかり橋下市長にも伝えます。通常のルート（情報公開室というところ経由）でも上げますし 橋下市長に直接メールします。久保田さんの気持ちに感動しました。ありがとうございました。旭区長Ｙ」

「今日の午前中に市長にメールしました。市長はすぐに市の関係局に指示し、府知事にも連絡し依頼をしています。市長から久保田君に以下の内容を伝えてくれと言われているのでお伝えします。　旭区長Ｙ」

【市長メッセージ】
「久保田君、貴重なご意見を頂きありがとう。市長として久保田君のこのような状況に思いが至らず、本当にごめんなさい。小児がんの子どもの治療を少しでもサポートしようと、知事時代に母子センターという病院に家族の人も泊まれる施設を作ることを指示したんだけど、久保田君の状況は全く認識していませんでした。知事や府庁の幹部、府教育委員会、市役所幹部、市教育委員会にしっかり伝え、指示しました。知事もすぐに指示を出して下さると思います。
僕ら政治家は大きな話をしたがるけど、久保田君一人を救えないなら政治なんて要りません。府庁も市役所も府教委も市教委も、大の大人が山ほどいるんですから、久保田君をしっかりとサポートします。これまで不便をかけて本当にごめんなさい。久保田君の意見で、同じような状況で困っている友達が、これからたくさん救われます。
久保田君、人生しんどいことがあっても頑張れば必ず報われる。人生捨てたもんじゃない。日本社会は捨てたもんじゃない。久保田君の頑張りは、文章から溢れんばかりに伝わってくる。僕ももう一頑張りしないといけないと、エネルギーをもらったよ。O高校への入学。ほんと頑張ってるな～ ＳＫＹＰＥに中高生の会。頭が下がります。
今回の久保田君の行動こそ公の行動。勉強させてもらいました。人生なんて楽なもんじゃない。それでも価値がある。お互いに頑張ろう！　　２０１２年２月１日 大阪市長　H」

【区長さんのメールの続き】
「久保田君、先ほど市長から、大阪府の中西教育長が『至急検討して報告します』とメールを送ってきたということで、府教委が対応してくれることになりました。市教委もよろしくお願いします。　区長　Y」

【知事メッセージ】
「久保田君
市長から君のこと、君が頑張っていることを聞きました。
病気が回復に向かっているようで良かったですね。
久保田君から教えられた東京都の制度を検討する様に、府教育委員会に指示いたしました。
病気と闘いながら頑張っている子ども達を応援するのは行政として当然です。
今回は教えてくれて『ありがとう』　知事　M」

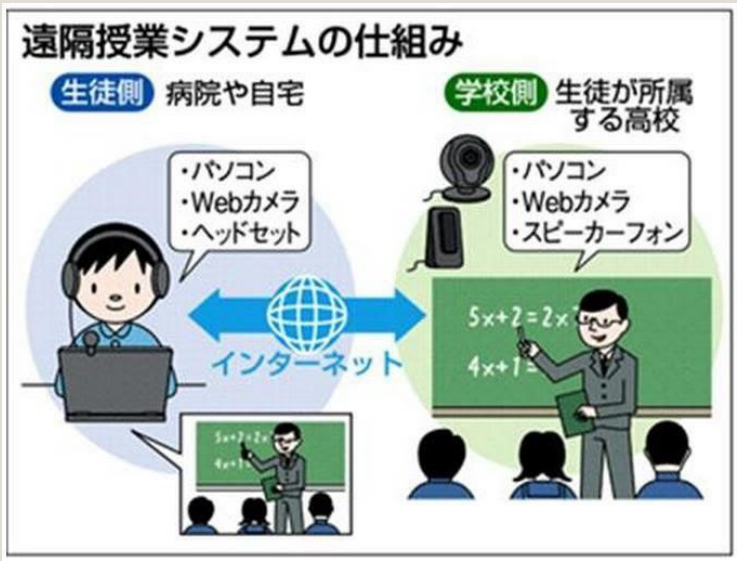
【区長さんのメールの続き】
「ちょっとごぶさたでした。市長から『府が対応する』と言ってきたよというメールをもらいました。また、知事から直接電話があり、久保田君からのメールを送付してほしいと言われました。その電話の時、『しっかりやりますから』とも言っていただきました。また、動きがあれば久保田君にメールします。
私は久保田君の努力と市長の動きの早さに感動したので、区ＨＰなどで報告しました。
区長　Y」（以下省略）

鈴之介さんが遺してくれたもの・そして次の課題へ）

以上の結果、2013 年度から院内学級という制度ではありませんでしたが、非常勤講師派遣という形で入院高校生にも勉強できる機会ができ、制度として確立しました。
鈴之介さんは大学入試のセンター試験を受けて 10 日後に亡くなりましたが、病弱高校生に勉強ができる制度を遺してくれました。
また亡くなった後に、鈴之介さんが生存時に同級生が教室でタブレットを通じて授業や文化祭などを病室へ映像が届けられていたことを聞いて、IT 事業者の寄付で大阪に遠隔授業が制度としてスタートしました。
これが大阪の高校生の病弱教育改善の経緯です。
１０年を経て現在の課題として大きく残っているのは、最初に鈴之介さんが要望していた闘病仲間と一緒に教室で過ごし、心を通わせ悩みを打ち明けたりできる高校生の院内学級がまだできていない、ということです。

（産経新聞より）

（産経新聞より）



久保田一男

難病学生患者を支援する会事務局
全国病弱教育研究会事務局
息子の鈴之介さんの遺志を継いで病弱学生を支援する制度を全国に拡げる活動やがん患者を支援するリレー・フォー・ライフジャパン大阪あさひでの活動などを行う。